

珠洲市  
経念遺跡

—県営ほ場整備事業若山地区経念工区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書一

1996

石川県立埋蔵文化財センター

# 経念遺跡

石川県立埋蔵文化財センター

## 例　　言

- 1 本書は石川県珠洲市若山町経念地内に所在する埋蔵文化財包蔵地である、経念遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 経念遺跡の発掘調査は、石川県農林水産部耕地整備課（現在は農地整備課）所管の県営は場整備事業若山地区の施工に起因するもので、同課の依頼により石川県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 現地調査及び屋内整理、報告書刊行に係る費用は、一部文化庁から補助金を得た他は耕地整備課が負担した。
- 4 現地調査から屋内整理、報告書刊行に至るまでには下記の機関、個人の協力を得た。  
文化庁記念物課、石川県農林水産部耕地整備課、石川県珠洲土地改良事務所、珠洲市教育委員会、大藤雅男、大安尚寿、大蔵智子、加賀真樹、藤重 啓、前田雪恵（個人名五十音順、敬称略）
- 5 現地調査の期間、面積、費用、担当者は下記の通りである。

調査期間	平成4年5月18日～6月11日
調査面積	約330 m <sup>2</sup>
調査費用	2,121,737円（県費・国庫補助金合算）
調査担当	石川県立埋蔵文化財センター主任主事 本田秀生、同主事 安 英樹
- 6 出土遺物の写真撮影及び写真図版の作成は安が行った。
- 7 本報告書の執筆は第1章を松浦都乃が、第3章第3節1を前田雪恵が、その他を安が分担して行い、総集は本田、安が協議の上、安が行った。
- 8 本文・図版・挿図についての凡例は下記の通りである。

(1)方位は全て真北を指し、水平基準は海拔高である。(2)挿図の縮尺は図内に示した。(3)図版の出土遺物の縮尺は不同である。(4)出土遺物番号は挿図・図版で共通する。(5)遺物挿図の珠洲実測図は断面を黒塗りしている。(6)挿図には、数字：LETRASET instant lettering NoJPN-7246-N・同7244-N・DECAdry14、アルファベット：LETRASET instant lettering NoJPN-7219-C、矢印：LETRASET instant lettering NoJPN-7269を使用した。(7)挿図には、万線（地山）：LETRASET SCREEN-TONE No1071、網点：LETRASET SCREEN-TONE No1208・同No102、バターン絵柄（縦）：LETRASET SCREEN-TONE No782を使用した。(8)註、参考文献は章毎にまとめ、それぞれの章末に示した。
- 9 発掘調査で得られた記録資料、出土遺物は石川県立埋蔵文化財センターで保管している。

# 目 次

## 報告書抄録

第1章 位置と環境 .....	1
第1節 遺跡の立地と自然環境	
第2節 周囲の歴史的環境	
第2章 経緯と経過 .....	5
第1節 発掘調査に至るまで	
第2節 現地調査	
第3節 屋内整理	
第3章 遺構と遺物 .....	7
第1節 概要	
第2節 遺構	
第3節 遺物	
1 土器・陶磁器	
2 石器	
第4章まとめ .....	24

## 図版目次

- |        |                 |         |                         |
|--------|-----------------|---------|-------------------------|
| 図版 1 上 | 1号溝（東から）        | 図版 7 下  | 9区 88m地点（北から）           |
| 図版 1 下 | 2号溝（南から）        | 図版 8 上  | 10区 93m地点土層（西から）        |
| 図版 2 上 | 3号溝（北から）        | 図版 8 下  | 10区 93m地点（北から）          |
| 図版 2 下 | 3号溝土層（東から）      | 図版 9 上  | 4号溝板材出土状況（東から）          |
| 図版 3 上 | 4号溝（南から）        | 図版 9 中  | 8区 76m地点木出土状況（東から）      |
| 図版 3 下 | 4号溝土層（南から）      | 図版 9 下  | 9区 86m地点土器出土状況<br>(北から) |
| 図版 4 上 | 8区 76m地点土層（西から） | 図版 10 上 | 1~6区全景（南から）             |
| 図版 4 下 | 8区 79m地点土層（西から） | 図版 10 下 | 7~11区全景（西から）            |
| 図版 5 上 | 9区 83m地点土層（西から） | 図版 11 上 | 12~18区全景（西から）           |
| 図版 5 下 | 9区 83m地点（北から）   | 図版 11 下 | 7~18区全景（東から）            |
| 図版 6 上 | 9区 86m地点土層（東から） | 図版 12   | 出土遺物                    |
| 図版 6 下 | 9区 86m地点（北から）   |         |                         |
| 図版 7 上 | 9区 88m地点土層（東から） |         |                         |

## 報告書抄録

ふりがな	すずしきょうねんいせき						
書名	株洲市経念遺跡						
副書名	県當ほ場整備事業若山地区経念工区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書						
編著者名	松浦郁乃、前田雪恵、安 英樹						
編集機関	石川県立埋蔵文化財センター						
所在地	石川県金沢市米泉町4丁目133番地						
発行年月日	平成8年3月29日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
	市町村 遺跡番号		〃	〃			
経念遺跡	石川県株洲市 若山町 経念地内	17205	113	37° 27' 20"	137° 15' 8"	19920518~ 19920611	330 ほ場整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
経念遺跡	散布地か 集落遺跡	縄文時代 ~ 中世	溝5条 落ち込み2基	縄文土器、弥生土器、 土師器、須恵器、珠 洲焼、打製石器、木 器	弥生時代後期を中心 とし、中期とする複合集落 遺跡の縁辺部		

# 第1章 位置と環境

## 第1節 遺跡の立地と自然環境

珠洲市は、能登半島の先端に位置し三方を海に囲まれ、一方は輪島市・柳田村・内浦町に接している。地形的には、北西部に宝立山地、東南側を巡る丘陵地、飯田東方に広がる平床台地によって代表される海岸段丘、そして沖積平野に分けられる。奥能登は、低い山地で占められ一般的に山地が海岸線にまで迫っており、平野には恵まれない。ところが、珠洲市は、若山川・金川・鵜飼川・竹中川・磐若川の下流域にそれぞれ飯田・正院・鵜飼といった平野が発達している。しかし沖積層の厚さがうすく、そのためみるべき滞水層もなく、地下水を利用するための条件は極めて悪いとされる<sup>1</sup>。

経念遺跡が位置するのは、若山川中流域の左岸丘陵裾部である。市域を西から東へと流れ、中流域を過ぎるころから南へと方向を変え飯田湾へとそそぎこむ、市内で最長の川であり、その流域には多くの遺跡が存在している。経念遺跡のそばには経念横穴群(4)や経念古墳群(3)、縄文から中世にかけての遺物が採集されている古麻志比古神社遺跡(14)、中世の経念B遺跡(2)などがある。下流域は、現在珠洲市の中心地の飯田町である。

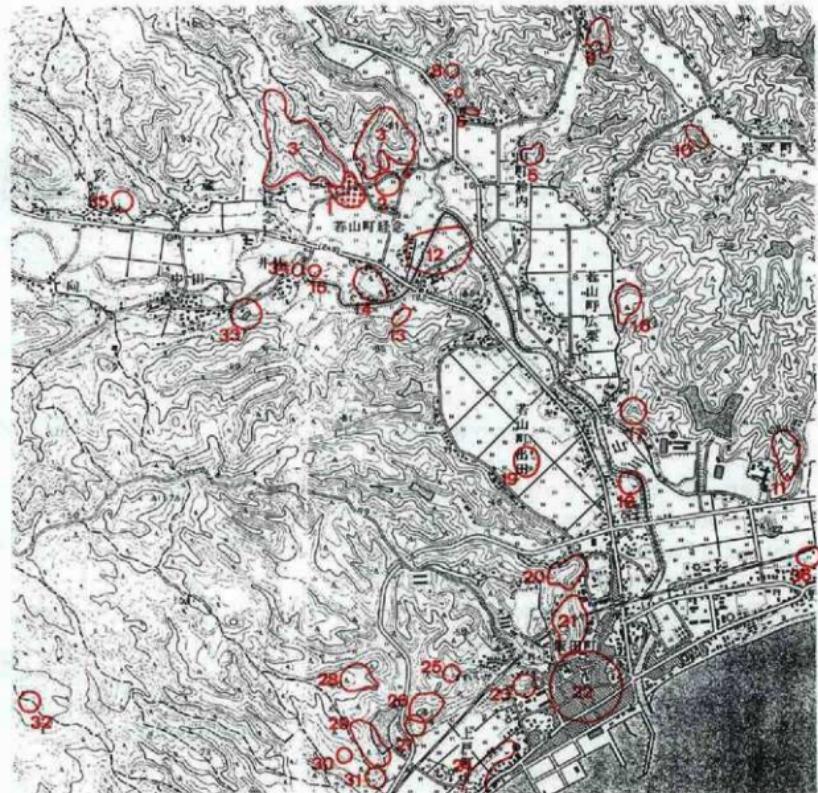


第1図 石川県全図

## 第2節 周囲の歴史的環境

珠洲市の旧石器時代としては、三崎町雲津遺跡・若山町井林遺跡(13)の尖頭器があげられる。いずれも出土状況が明らかではないため、所属年代を確定することは難しいが、類品から晩期旧石器時代もししくは縄文草創期とされる<sup>2</sup>。縄文時代の遺跡は、前期から晩期にかけて広くみられる。現在50程の遺跡数が確認されているがその多くが台地上、または丘陵上に位置している。高波ふるや遺跡は、前期末から後期中葉までの土器がみられる長期にわたる遺跡であった。縄文海進が終わると、除々に海岸線も後退していくとされる<sup>3</sup>。それに伴い、後・晩期に入ると市域の縄文遺跡も丘陵上より海進時は低湿地であった平地へと移動していった。若山川流域は、火宮遺跡(35)・広葉向山遺跡(16)・北方池の下遺跡(31)・北方大門口遺跡(23)などがみられる。

弥生時代、珠洲では高波ふるや遺跡から弥生中期の櫛撻文土器がみられ<sup>4</sup>、大規模な平野部をもつ加賀や邑知周辺に比べ恵まれた土地ではなかったと思われるが、この頃には稻作も行われていたと思われる。経念遺跡(1)は若山川の中流域にあるこうした時代の集落である。他には出田遺跡(19)がほぼ同時期のものであるが、全体として珠洲市内で確認されている弥生時代の遺跡は少なく、今後若山川・金川などの流域から当時期の遺跡が確認される可能性は大きいと思われる。



- 1 経念遺跡(弥生 古墳) 2 経念B遺跡(中世) 3 経念古墳群(古墳) 4 経念横穴群(古墳) 5 鈴内山岸財友横穴群(古墳) 6 鈴内山岸財友横穴群(古墳) 7 鈴内山岸宮の高横穴群(古墳) 8 鈴内山岸為重横穴群(古墳) 9 鈴内二の谷横穴群(古墳) 10 岩坂藤原山横穴群(古墳) 11 野々江ミヨウケン山古墳群(古墳) 12 落合御坊跡(南北朝～室町) 13 井林遺跡(旧石器～縄文) 14 古麻志比古神社遺跡(縄文 弥生 平安 中世) 15 井林庚申塚(江戸) 16 広葉向山遺跡(縄文 古墳) 17 野々江匂川屋敷遺跡(縄文 中世) 18 出田有政遺跡(古墳) 19 出田遺跡(弥生) 20 被田1、2号横穴(古墳) 21 被田城山遺跡(宝町) 22 被田町遺跡(平安～中世) 23 北方大門口遺跡(縄文) 24 北方遺跡(古代) 25 日光社遺跡(古墳) 26 上戸陣ヶ平古墳群(古墳) 27 北方池の下FB遺跡(古墳) 28 北方うれの遺跡(縄文) 29 上戸大池古墳群(古墳) 30 あまきび焼窯跡(江戸) 31 北方池の下遺跡(縄文) 32 寺社かめおり坂窯跡群(鎌倉) 33 大日寺跡(鎌倉～室町) 34 井林2号庚申塚(江戸) 35 火宮遺跡(縄文 奈良 中世) 36 野々江島田遺跡(古墳)

第2図 経念遺跡と周辺の遺跡 (S=1/25,000)

やがて、稻作がより安定したとされる古墳時代社会のなかで富の蓄積に伴う、階層の分化が一層進行した。首長層の出現により株洲市域においても古墳が築造されていく。若山川左岸の丘陵部には150基にも及ぶ古墳、経念古墳群(3)が造られている。この辺りは、奥能登では最も早くから発達した古墳群であった。6・7世紀代には、水禪寺古墳群や春日野大畠古墳群があらわれ、大畠1号墳からは、金銅装双頭式環頭太刀が採集された。この頃から遺跡数も増加し、若山川・金川流域の平野ではその傾向著しく、これらの河川を臨む山岳部に200基以上の横穴墓が造られ、株洲市域のおよそ半数の横穴墓が集中しているとみられる。株洲市は横穴墓集中度が高い地域で、推定ではあるがその數は、500基は下らないとされる。田嶋明人氏は若山川・金川・竹中川・磐若川などの所属水系を単位とし、さらにその構造差により横穴墓を5つのブロックにわけた。このブロックは水系を単位とした平野・丘陵地などに区画された自然地形上を政治的な単位としている<sup>3</sup>。若山川流域は、経念・鈴内地区にある横穴墓群を中心とする中流域をひとつのブロックとしている。若山川下流域は平野が発達しており農業による生産力は他の水系よりも高かったであろう。また、それ以外の漁業や、ますます盛んになっていく製塩業などの手工業に対しても力を及ぼしていったのが、横穴墓に埋葬された人々であったと思われる。

「スズ」の名称の記録は現在確認されているものでは、養老二年(718)まで遡り<sup>4</sup>、越前国の一郡であった株洲(珠々?)郡は能登・羽咋・鳳至の三郡とともに、新しく能登国に立国されている。また、株洲に郡制が施かれていたのならば郡衙もいつの時点からか存在したものと思われる。正院は地名、東西の方格地割などから従来その可能性が高いとされてきたが、現在はそれらが古代まで続るものかどうか、再考を要しよう。若山川流域は、若狭郷とされ、ほかに日置・草見・大豆の四郷と余戸がおかれた。そのうち現在の地域に比定しうるのが若山川下流域の若狭郷だけであり、上戸町北方遺跡(24)・北方山岸B遺跡は若狭郷のころの遺物や遺構が確認されている。ほかの三郷については諸説があるが、前述した横穴墓のブロックに対応するような主な河川の流域が相当してくる可能性はある。康治2年(1143)には能登国司・源俊兼により南は真脇村から北は正院八条袋、西は町野院境山を、東は海までとされる地域が若山庄として立券され、その子季兼により崇徳上皇の後・藤原聖子に寄進されている。遅くともこの段階には能登で最大級の規模の郡庄が成立していたものと思われる。中世後半になると同庄は木郷郷・直郷・飯田郷・若山郷・西海岸の四郷一浦になり、水系単位の伝統的な小地域が解体することなく再編されたことがうかがわれる。

中世の株洲において最も有名なのが株洲古窯である。従来は須恵質陶器を焼成するこの窯を、古代における須恵器の遺存現象とし奥能登を文化の遲遠、停滞地域とみなしていた<sup>5</sup>。昭和36年の「日本海総合調査」考古班により、須恵器とは異なる中世陶器としての位置づけがなされ、「株洲焼」・「株洲古窯」の名がつけられた。株洲古窯は12世紀中頃から生活必需品の壺・壺・擂鉢を中心とし、寺院などからの要求にこたえた宗教容器も作られた。現在、株洲焼の編年は吉岡康暢氏によりI~VII期にわけられている<sup>6</sup>。豊富な陶土と燃料資源を背景に寺社カメリ坂窯(32)などでまず生産が始まったときれ(I~II期)、13世紀から14世紀にかけて海運を利用して南は加賀から、北は北海道南までの広い範囲にその製品が流通している(III~IV期)。この頃株洲焼は中世大野澤の一部とされる金沢市普正寺遺跡や、函館の志海苔遺跡にみられ、大畠窯や法住寺三号窯・西方寺二号窯などが確認されている当時の窯跡とされる。しかし、15世紀にはいると株洲焼は、窯の規模を拡大し生産体制を集約化して急成長を遂げていった越前焼との販売競争にやぶれ、衰退の途をたどっていく(V~VII期)。廃絶期の窯跡とされるのが西方寺一号窯跡である。この窯跡は天井部が残存しており、当時の窯体を知ることができる。株洲焼は若山庄内にはほぼ限定してつくられており、経営主体は、燃料資源の確保や舟運への

依存度の高さを考えると郷の土豪的有力名主であったとされ、他地域にくらべて生産力におとる農業以外の経済活動として積極的にその經營を行ったとされる。彼らにより開拓にあたり工人が招かれたことは予測されるが、やがて、百姓たちの農閑期の副業として行われていったとされる。ほかにも中世においては、掘立柱建物や井戸跡がみつかった飯田町遺跡(22)、飯田城山遺跡(21)、正院町にある正院川尻城跡があげられる。飯田城山遺跡は、二つの郭が認められる室町時代の城跡であり、堀、井戸跡と推定されるものも認められている。正院川尻城跡は、「土居」「高要害」「下要害」などの地名を残し<sup>10</sup>、郭・内濠・土里・空堀などの遺構がみられる奥能登屈指の中世城郭であり、能都町の棚木城とならび奥能登の戦国時代を知るうえでの貴重な遺跡である。

近世にはいると井林2号庚申塚(34)、カンド山武家屋敷跡、御山武家屋敷跡、あまきび焼窯(30)、三杯焼窯といったものが遺跡として確認されているのみである。

ところで、珠洲の海岸沿いには多くの製塩遺跡がある。農・魚業以外の生産活動として古墳時代から土器製塩が行われていたことが、三崎町の森腰浜遺跡において確認されている<sup>11</sup>。以後、古代・中世、土器から鉄釜に移り変わっても盛んに行われたと思われ、江戸時代においては加賀藩の専売創下におけるが、常に地域の主産業であり続けた。しかし、明治後半以降、生産効率のきわめて高い瀬戸内産塩、国外産塩の前に、揚浜式塩田による能登地方の製塩は衰退し、明治43・44年(1910・1911)、昭和4・5年(1929・1930)、昭和34・35年(1959・1960)の三度の塩田・塩業整理の実施ではば姿を消した。現在では珠洲市仁江町角花家で行われるのみとなっており、唯一、往時の姿を残している<sup>12</sup>。

#### 註

- 1 細野義夫・平山寅松 「自然編第二章 地形と地質」『珠洲市史』第一巻=資料編 自然・考古・古代 珠洲市史編さん専門委員会 1976年
- 2 平口哲夫 「考古編第一章第一節 晩期旧石器時代の遺物」『珠洲市史』第一巻=資料編 自然・考古・古代 珠洲市史編さん専門委員会 1976年
- 3 高堤勝喜 「通史編第一章第一節 珠洲市域の石器時代」『珠洲市史』第六卷通史・個別研究 珠洲市史編さん専門委員会 1980年
- 4 註3に同じ
- 5 田嶋明人 「考古編第二章第四節 珠洲地域の横穴群と構造」『珠洲市史』第一巻=資料編 自然・考古・古代 珠洲市史編さん専門委員会 1976年
- 6 門脇慎二 「通史編第二章 珠洲と古代国家」『珠洲市史』第六卷通史・個別研究 珠洲市史編さん専門委員会 1980年
- 7 吉岡康暢 「考古編第二章第四節 珠洲古窯跡」『珠洲市史』第一巻=資料編 自然・考古・古代 珠洲市史編さん専門委員会 1976年
- 8 吉岡康暢 「紹論珠洲の古陶」『珠洲の名陶』 1989年
- 9 石川県立旗津文化財センター 「飯田町遺跡」 1992年
- 10 東西柳史明 「通史編第三章 中世の珠洲」『珠洲市史』第六卷通史・個別研究 珠洲市史編さん専門委員会 1980年
- 11 橋本澄夫 「考古編第二章 集落遺跡と土器製塩遺跡」『珠洲市史』第一巻=資料編 自然・考古・古代 珠洲市史編さん専門委員会 1976年
- 12 長山直治他 「製塩編」『珠洲市史』第四巻=資料編 神社・製塩・民俗 珠洲市史編さん専門委員会 1974年

#### 参考文献

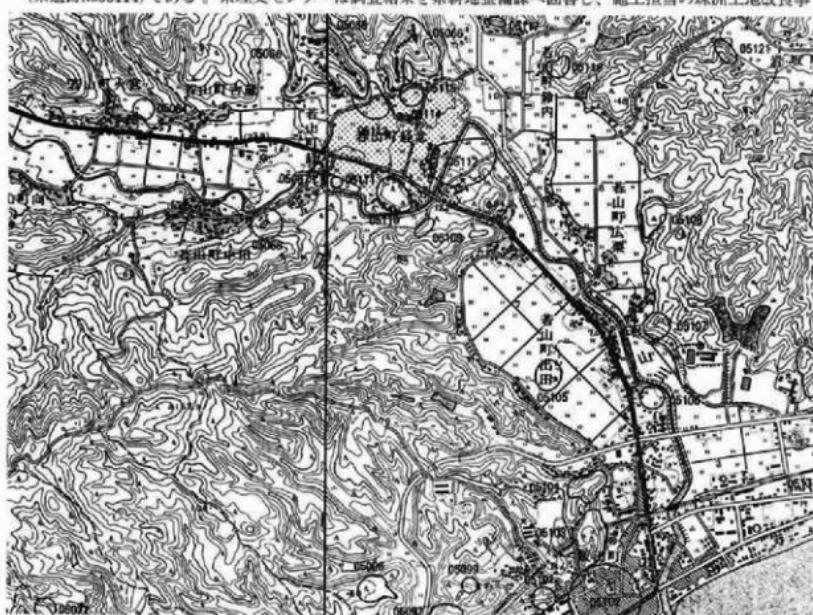
- 1 橋本澄夫 「牛島先端の珠洲市域」『日本の古代遺跡43 石川』 1990年
- 2 吉岡康暢 「紹論珠洲古陶」『珠洲の名陶』 1989年
- 3 吉岡康暢 「珠洲陶から越前庵へ」『日本海と北國文化』 1990年
- 4 田嶋明人 「通史編第一章第二節 古墳社会の形成」『珠洲市史』第六卷通史・個別研究 珠洲市史編さん専門委員会 1980年
- 5 若林喜三郎 「通史編第四章 漢紋時代の珠洲」『珠洲市史』第六卷通史・個別研究 珠洲市史編さん専門委員会 1980年
- 6 三浦ゆかり 「1 飯田遺跡の環境」『飯田町遺跡』石川県立旗津文化財センター 1992年

## 第2章 経緯と経過

### 第1節 発掘調査に至るまで

石川県農林水産部は耕地整備課（現在は農地整備課）を主管課として県下の水田のは場整備事業を進めている。石川県立埋蔵文化財センター（以下、県埋文センター）は、県耕地整備課に対して次年度に実施予定の事業の内容照会を毎年行っており、関係する埋蔵文化財の保護について協議を重ねている。具体的には埋蔵文化財の有無を確認するために現地踏査、試掘等の方法で分布調査を行い、埋蔵文化財が分布する場合はその範囲、層位、地表からの深さ等、詳細な分布状況を把握する。そのデータをもとに、工事が遺跡に影響を及ぼさない設計となるよう、施工担当の各土地改良事務所に指導を行う。設計・工法の変更が不可能で埋蔵文化財に影響が及ぶ箇所、例えば深い掘削を伴う排水路敷設箇所等については緊急発掘調査を行い、記録保存措置を取る。県埋文センターは、県営は場整備事業の実施に際しては概ね以上の様に対応している。

珠洲市若山町経念地内については、若山地区経念工区として面積23haを対象に平成3年度に計画・設計がなされ、平成4年度の工事着手、7年度の完了が予定された。この件について、県埋文センターは県耕地整備課と協議の後、施工予定区域内の埋蔵文化財の有無を確認するためには分布調査が必要であると判断し、施工担当の珠洲土地改良事務所と打ち合せの後、平成3年12月19日・20日に分布調査を実施した。その結果、区域の北部の2箇所で新たに埋蔵文化財が確認された<sup>1</sup>。名称は東から経念遺跡（県道跡No5113）、経念B遺跡（県道跡No5114）である<sup>2</sup>。県埋文センターは調査結果を県耕地整備課へ回答し、施工担当の珠洲土地改良事務所へ報告した。



第3図 県営は場整備事業対象区域 (S=1/25,000)

務所と協議の結果、埋蔵文化財包蔵地における土工事について、田面工事に関しては盛土工法で保存、排水路敷設工事については事前に発掘調査を実施すると言う方針で合意した。

県耕地整備課は翌平成4年4月に排水路敷設箇所の発掘調査を依頼し、県埋文センターは5月から6月にかけて実施を予定し、その旨回答、計画書を提出した。発掘調査は、経念遺跡において排水路が敷設される区域、約330m<sup>2</sup>が対象となった。経念遺跡の発掘調査は、以上の経緯で実施に至ったものである。

## 第2節 現地調査

現地調査<sup>3</sup>は平田天秋（当時センター調査第一課長）が統轄、中島俊一（同主査）が指導、本田秀生、安英樹（同主査）が担当し、川畠誠（同主事）、大藤雅男（同調査補助員）の助力を得た。

調査着手前には珠洲土地改良事務所担当者、経念工区長と現地打ち合せを行い、プレハブ建物の設置場所の提供、発掘調査作業員の確保について、協力を受けた。

現地調査は平成4年5月18日から着手した。第3章で後述するが、調査区の一部で地形が下降して非常に深くなる箇所が確認され、自然河道と推定される落ち込みを検出した。部分掘したところ、底面までの深さは地表面から2m以上に達し、幅員が2mの調査区においては、壁面の崩壊等の危険が伴い、完掘するの不可と判断された。一方で排水路敷設に伴う掘削レベルよりも低くなり、造構が直接損傷を受けないことが判明した。よって、部分的なち割り調査を実施するにとどめ、作業の安全性に配慮した上で、落ち込みの層位、時期を確認している。調査作業は6月11日にすべて完了し、器材を撤収した。出土遺物はパンケースで5箱に及ぶ量であった。

現地調査作業には下記の方々の参加があった。

井林彦吉、井林昌信、兼西愛子、末政二三子、末政洋子、田中禮子、友兼せつ子、前はな子、前田きりえ、谷内きくい、谷内信子、谷内久子、山岸さだ子（若山町経念地内）

## 第3節 屋内整理

屋内整理作業は次の工程を行った。

出土遺物洗浄・記名・分類・接合・復元・実測・トレース・写真撮影作業、遺構図トレース作業、報告書作成  
なお、出土遺物のうち、繩文土器と弥生土器については非常に脆弱であったため、洗浄作業にあたってはバインダー溶液で補強処理を行った。

屋内整理作業には大藪智子、藤重 啓、前田雪恵が参加した。

### 註

1 石川県立埋蔵文化財センター『年報』第13号 1993年

2 石川県教育委員会『石川県遺跡地図』 1992年

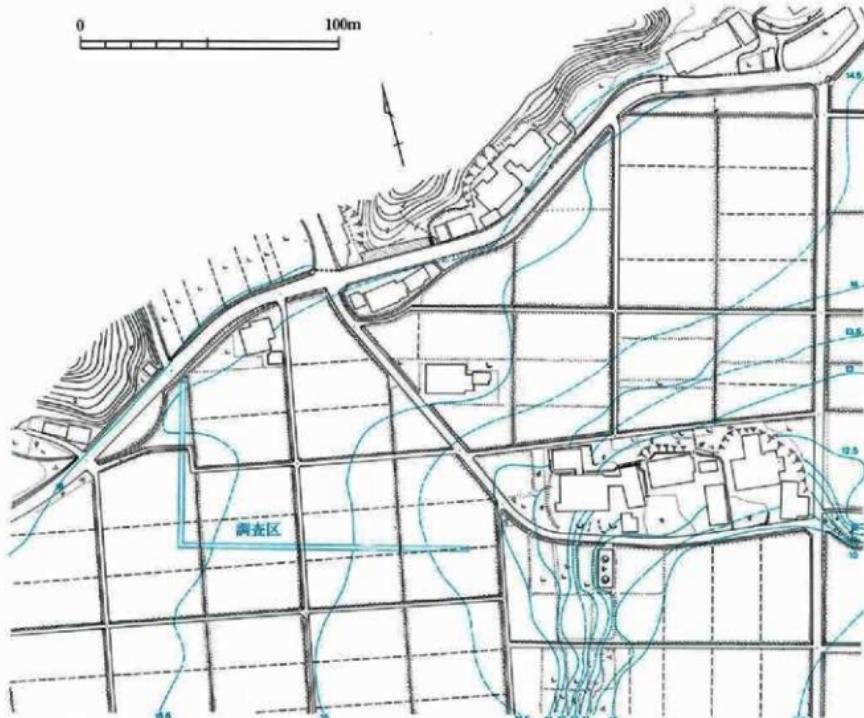
3 石川県立埋蔵文化財センター『年報』第14号 1994年

## 第3章 遺構と遺物

### 第1節 概要

経念遺跡の発掘調査は排水路敷設時に掘削が及ぶ幅2m、絶延長約170mの範囲が対象となった。調査区は、水路のセンターを主軸とし、経念の集落側から10m毎に区割りを行って1区から18区まで設定した。調査区の主軸は1区から6区ではN-16°-Eを指すが、60mの地点で水路が若山川下流側へ直角に曲って方向を変えるため、7区から18区ではN-74°-Wを指す。調査面積は、6区・7区の重複部分と11区が農道で断されて調査できなかった部分を差し引いた、約330m<sup>2</sup>である。

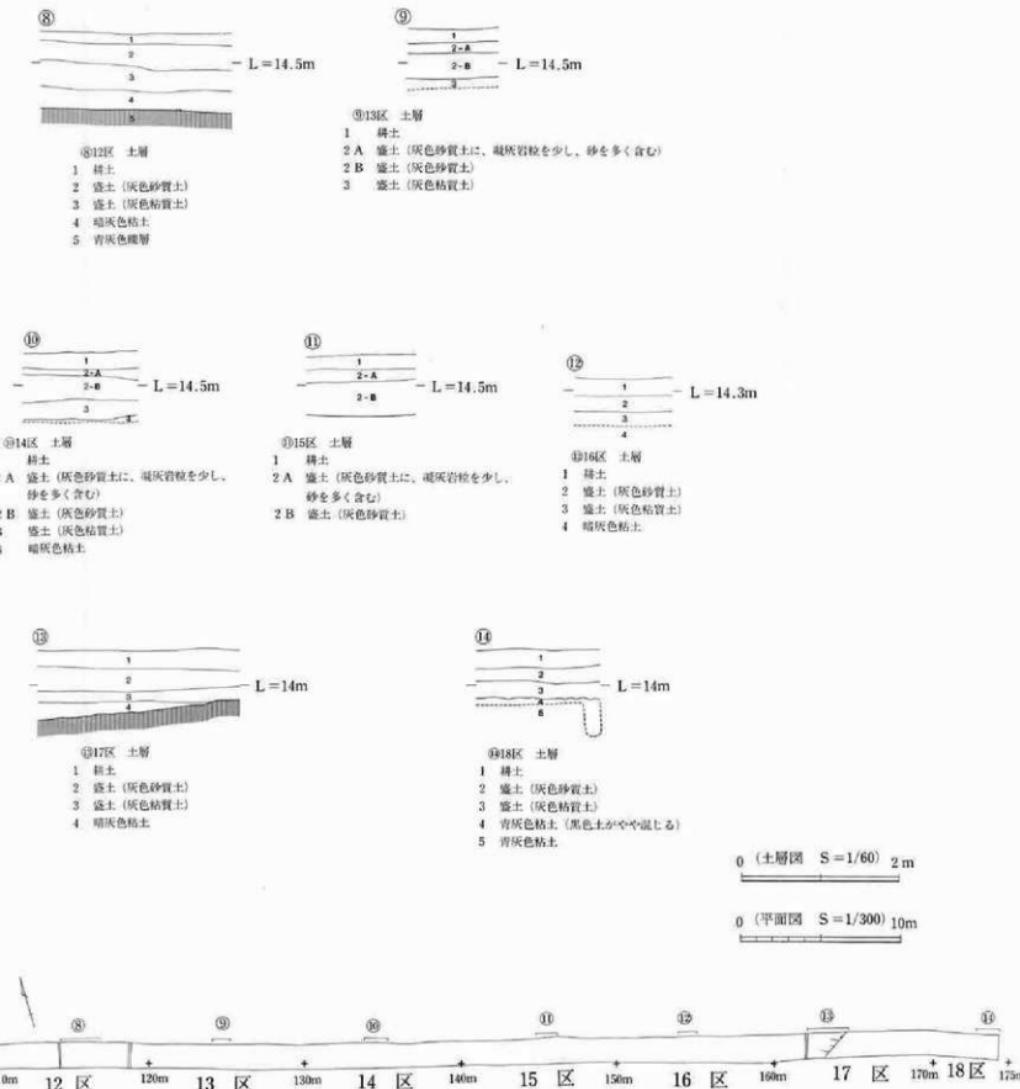
層序は基本的には上位から耕作土、盛土、遺物包含層、ベース土（遺構面）となる。盛土は粘土に大小の凝灰岩礫が混じる特徴的な土質であり、全体的に厚く、層厚60cm以上に達する箇所もある。周辺は昭和前半期に耕地整理がなされており、その際、地盤をかさ上げしたものと思われる。遺物包含層は暗灰色粘土（粘質土）と黒（灰）色粘土が相当すると思われるが、全般に含まれる遺物はあまり多くない。暗灰色粘土は1区から11区で見られる。黒色粘土はその下位で、7区から10区にかけて見



第4図 調査区の位置 (S=1/2,000)



第5図 調査区全体図(1)



られる。黒色粘土は地形が下降する区域で顕著に見られ、低所ほど厚く堆積して砂礫と互層的堆積をなしている。遺物包層とするよりは低地堆積土の類と見なした方が適切かもしれない。ベース土は青灰～灰色粘土（粘質土）であるが、6区など深い遺構が掘り抜かれていた地点では砂礫層がベース土となっている。おそらくベース土の下位には、地形が安定する以前の氾濫層が存在するであろう。遺構面の標高は山地に近い1区側で14.7m前後を測り、平野の中央部に向かって徐々に下降し6区で14.5m前後となる。そして、7区から10区ではさらに下降し、7区では最も著しく13.8～14.4mと落ち込む。8区・9区では13.6～13.8m、10区ではやや上昇し14m前後となり、以降18区まで多少の起伏を伴いつつ終始するようである。

発掘調査の結果、遺構は3区～6区で溝5条、8区～10区で落ち込み2基を確認した。2号落ち込みについては検出してたち割りで深さを確認した後、現場の保全と作業の安全を考慮して、各区で部分掘を行い、底面と層位を確認するまでにとどめた。5区、7区などでも溝状のものが存在するが、形状が不明確で、遺物も出土しなかったため、遺構としては扱わなかった。1区～3区、11区～18区の遺構はきわめて希薄な状況であった。遺物は弥生土器が主で、他に土器器、須恵器、陶磁器、石器、加工木、自然遺物が出土しており、全体でパンケース5箱に及ぶ量であった。

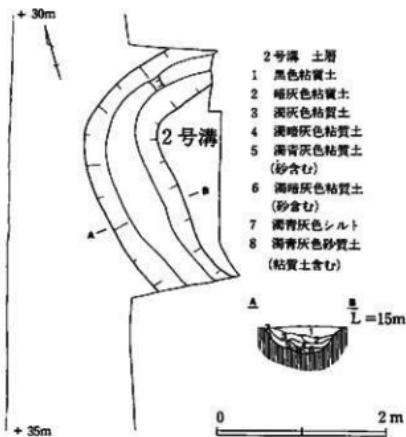
## 第2節 遺構

### 1号溝（図版1、第5図に土層）

3区南端に位置する。東西方向に走る溝の一部のようであり、両端とも調査区外へ出る。幅は西側で約36cm、東側で約42cmと、やや東側が広い。断面は緩やかなレンズ状を呈し、深さは約12cmを測る、浅い遺構である。覆土は3層（第5図④層6～8）、概ね上位が黒灰色土、下位が暗灰色土となる。遺物は出土しなかった。

### 2号溝（図7図、図版1）

4区北端に位置する。調査区の東壁付近で肩部を検出し、東側へ拡張してその規模・形状を確認した。ほぼ直角に折れ曲がる溝のコーナー部分であり、北部は東西方向、南部は南北方向に走り、コーナー部分は丸みを持って曲がる。幅は北部で約55cm、コーナー部分で85～90cm、南部で約75cmを測る。断面は緩やかなレンズ状を呈し、深さは北部で約20cm、コーナー部で約29cm、南部で約31cmと、南部が深く、標高も南部がより低い。さらに北部の溝底にはコーナー部へ向かう段状の落ち込みが認められる。覆土は8層（層1～8）、上位では粘質土であるが、下位ほど粒子が粗い覆土となり、最下位に砂質土（層8）が堆積する。層序から溝の掘削から埋没に至る過程は、若干ながら水流があった段階（層8）、徐々に埋まる段階（層5～7）、浅い覆みとなり水流はほぼなくなる段階（層2～4）、完全に埋まり切る段階（層1）と推定できる。水流については、溝底の状況から、北から南へ流れたものと考えられる。遺物は出土



第7図 2号溝実測図 (S=1/60)

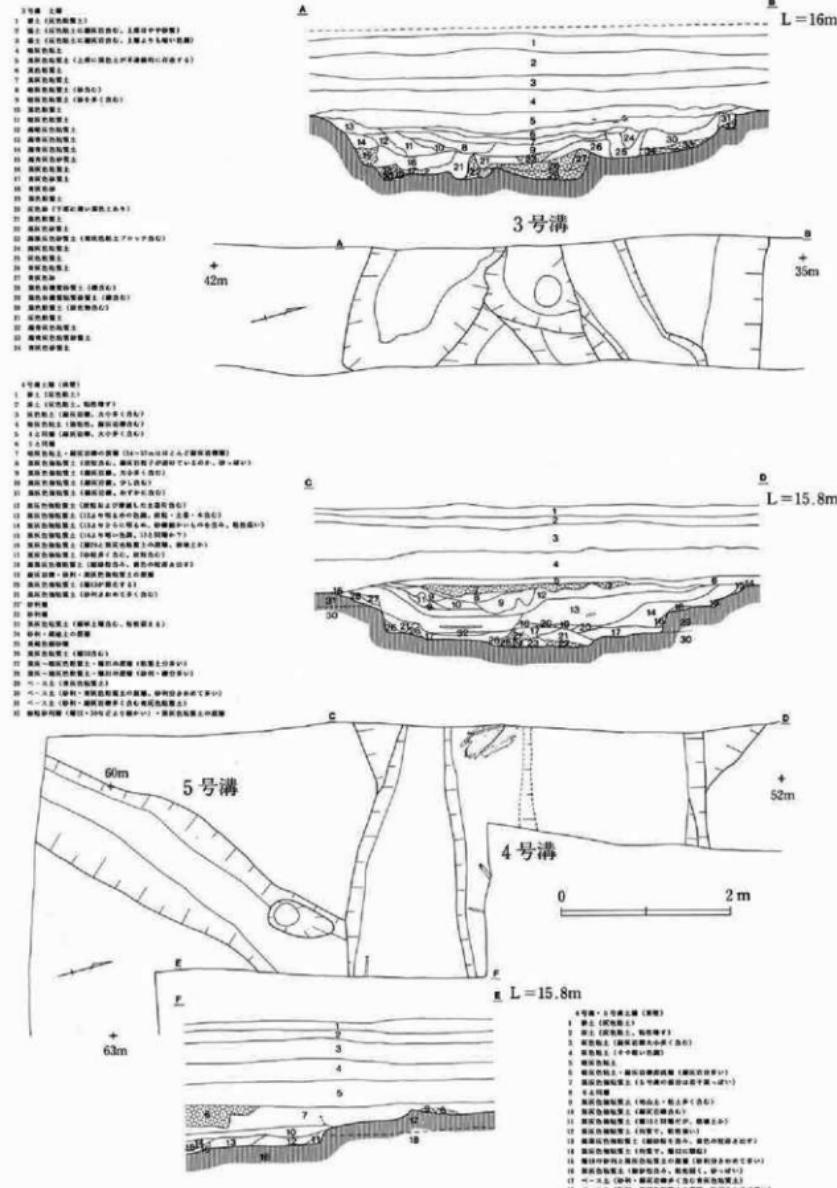
しなかった。

### 3号溝（第8図、図版2）

3区から4区の北端にかけて位置する。幅5mを超える大溝であるが、方向を違える溝が南北に重複しているものと思われる。北部の溝はまず肩部から緩いスロープ状に一段の落ち込みがあり、さらに東西方向に走る溝本体へ落ち込むようである。深さは1段目まで約42~51cm、溝底まで約70~84cmを測る。北部の溝そのものの幅は現状で約85cmを測る。南部の溝はかなり急な角度で掘り込まれており、南北方向かやや北西に振りて走る溝のようである。幅は現状で145cm前後で東壁側が狭くなるようあり、深さは62~86cmを測る。南北の溝は調査区の西壁付近で切りあっており、東側は両溝に挟まれる形でベース面が残っている。覆土は30層（層5~34）、基本的に下位は砂もしくは砂質土で、上位は粘質土もしくは粘土である。層位では各溝の明確な切りあいは確認できないが、層の上下に基づく先後関係から、溝の掘削から埋没の過程を①~⑤の段階に類推した。まず、①北側が掘削され水流があったものが埋まり（層22・27~29・33・34）南側の溝が前後して掘削される段階。次いで②全体が少し埋まるが南側の溝には水流があったと推定される段階（層17~21・23・26・30~34）。そして③南側の溝もほとんど埋まる段階（層14~16）。さらに④南北の溝がほとんど埋まり盡みとなる段階（層8~13）、この段階に性格は不明ながら小ビットが掘り込まれる（層24・25・31・32）。最後に⑤盡みも埋没し切る段階（層5~7）である。溝さらいや拡張については、当初のプランや堆積が失われてしまう行為であるため、行われた可能性はあるが、現状では否定も肯定もできない。遺物は層5から土器小片が出土したのみであり、各層の細かい堆積時期を知る資料はない。

### 4号溝（第8図、図版3）

6区に位置し、主軸にはば直交して走るため、方向は東西をやや北西に振り、調査区東壁付近で5号溝と重複する。東壁側を拡張して、5号溝との切りあいを確認した。幅5mに近い大溝で、溝の両岸はどちらも西壁側に肩部から緩いスロープ状に落ち込み、北岸側はさらに緩やかなテラス状の緩傾斜面を経て溝本体へ至る。北岸部では深さはテラス部まで20cm前後、溝底まで60cm前後を測る。南岸部では深さ29~38cmを測る。溝中央部が最も深くなり、深さ約63cmを測る。覆土は24層（西壁 層5~28）で、基本的に上部・中部・下部に大別できる。上部（層5~11）は大小の凝灰岩礫を含む粘質土堆積、中部（層12~13）は均質な黒灰色粘質土の安定した堆積、下部（層14~28）は砂礫と粘質土が混合し錯綜する堆積となる。各層の先後関係から、4号溝の掘削から埋没の過程は①~④の段階に類推した。まず、①全体が掘削され、水流があって、その中央部が埋まって盛り上がった状態の段階（層17~21~25）、この段階で遺構は南北の2溝に分割されていた可能性がある。次いで②溝の南北が少し埋まり、溝幅が4m前後に縮小する段階（層14~17・21・26~28・32）、ただし南北の堆積に時間差を持つ可能性がある。そして③水流がほとんどなくなり、溝幅が2m前後にさらに縮小する段階（層12~13）。最後に④盡みが埋まり切る段階（層5~11）、かなりの量の砂礫が短期間に堆積しており、洪水のような大量で強い水流で流れ込んだものと思われる。溝さらいや拡張については、3号溝同様、現状では否定も肯定もできない。水流については、溝底の状況では西壁側がわずかに低いのであるが、これだけの規模の溝であるから流向の断定は難しい。遺物は覆土から縄文土器、弥生土器、板材、棒材、木片、石核状の石が出土している。板材等、木製遺物の多くは覆土中部から出土している。縄文土器および条痕調整の土器は、小破片につき流れ込んだものと捉えている。弥生土器は覆土中部から第11図2、同下部から3・4が出土しており、弥生後期においてあまり時期差がない。よって4号溝の掘削から、覆土下部そして中部への堆積は弥生時代後期に、あまり時間をおくかずに進行したものと思われる。



第8図 4区～6区遺構実測図 (S=1/60)

### 5号溝（第8図）

6区に位置し、北東・南西方向に振って走る。幅は90~125cmを測る。断面は緩やかなレンズ状を呈し、深さは14~17cmを測る浅い溝であり、溝の南北での高低差は小さい。北部の溝底には小ビットが掘り込まれており、長径80cm・短径38cmの長楕円の平面形で、溝底からの深さ約39cmを測る。覆土は黒灰色強粘質土の単層（第8図東壁層7の一部）で、4号溝の覆土中層と同質で重複するが、土層観察では5号溝が切っている印象を得ている。4号溝の覆土中層の堆積中に掘削され、ほぼ同時期に埋まり切ったものと推定している。遺物は覆土から弥生土器が出土している。

### 1号落ち込み（第9図）

8区西端に位置し、地形的には7区64m地点から8区側に向かって始まる下降の途次に、北壁側で検出した。遺構の北部は調査区外にあり、全形は不明である。現状で径約90cm、深さ約6cmの浅い、不明確な遺構である。2層の覆土（層6M・6N）は、下降した地形が埋没して行く過程の粘土と砂礫の互層（層6A~6O）の一部となる。遺物は層6Mから第11図6の弥生土器と加工木片が重なって出土した。また、落ち込みの東50cm先で同様に弥生土器と加工木片が出土している。層位的には層6Mの直上で同質の層6Dに含まれ、関係が深いものと思われる。1号落ち込みについては、おそらく低地の窪みであって、それが埋まる際に投棄か流れ込みか定かでないが、遺物が含まれた可能性が高い。

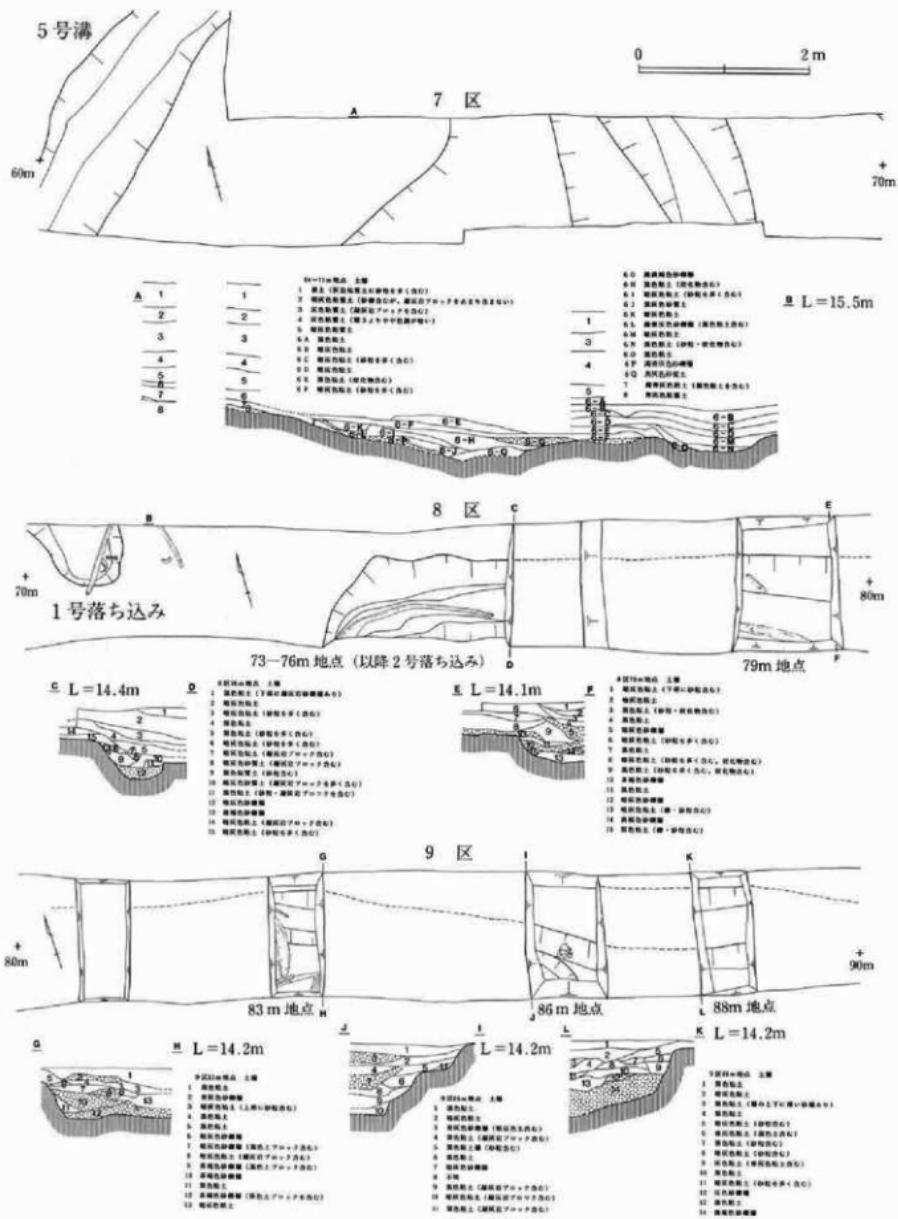
### 2号落ち込み（第9・10図、図版4~8）

8~10区にかけて検出し、部分的にたち割ってその概要を確認した、南側へ下降する一連の落ち込みである。きわめて規模が大きく、確認した範囲だけで延長20mを超えており、しかも直線的な溝状ではなく、蛇行ぎみに走るようである。層位は基本的に砂礫と粘土の互層的な堆積をなすもので、概ね上位ほど砂礫の含みが少ない細粒の覆土となる傾向があるが、必ずしも規則的ではなく、地点毎に異なった状況を示している。

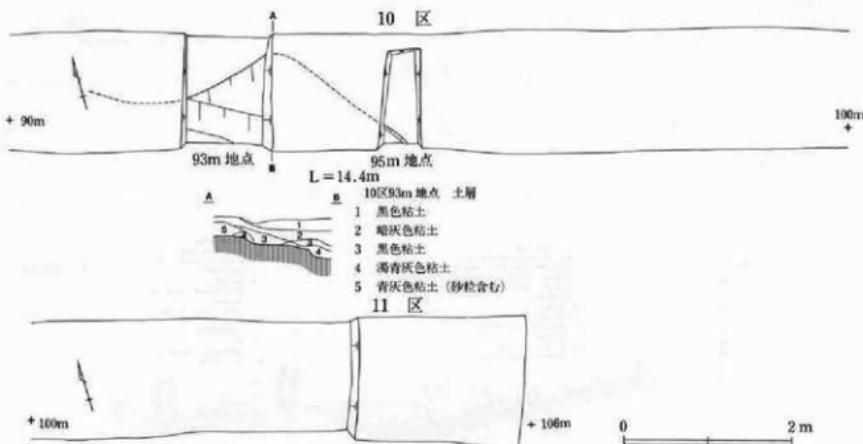
8区の73~76m地点では大きくカーブして方向を変えている部分にあたると思われる。正確な方位は不明である。この地点での落ち込みはかなり急であり、現状で約64cmの深さを測る。底面には幅40cm程度の溝が同じ方向に見られ、落ち込みに伴うものと思われる。砂礫（層12）で埋まった溝内から自然木が出土している。8区79m地点では主軸に沿った方向をとり、以降10区まで大きく変わることはない。深さは30cm以上に達するが、底面まで十分掘り切れておらず、正確にはわからない。最下層と推定される砂礫を含む粘土（層13）からトチノミが、その上位の砂礫層（層12~14）から自然木が出土している。自然木については壁面に食い込んだ部分が多く、取り上げることができなかつた。

9区の83m地点では、8区73~76m地点のように、底面に幅60cm程度の浅い溝が並走する。深さは約16cmを測り、前後の地点よりかなり浅い。底面に堆積する砂礫層（層12）から自然木が多く出土したが、8区同様取り上げられなかった。9区86m地点では2段の階段状を呈して急速な落ち込みが認められ、一方で底面の溝の南側肩部が捉えられなくなっている。深さは一段目まで約60cm、底面まで約85cmを測る。上位に堆積する粘土層（層2）から弥生土器（図版9）が出土している。9区88m地点では底面の溝は完全に捉えられなくなる。この地点の落ち込みは肩部は急激、以南は緩やかに下降するようである。深さは約55cmを測る。底面には厚さ30cmを超える砂礫層（層12~14）が堆積しており、その上位は粘土（層6・9・10・13）、さらに上位は砂礫を含む粘土（層5・7・8・11）となり、土質で比較的明確に大別分層できる地点となる。

10区の93m地点では落ち込みはやや緩やかになり、底面まで約35cmと9区に比べると浅くなっている。浅くなり標高が高くなるためか、覆土は砂礫が少なくなり、粘土層で占められる。10区95m地点では南壁際でわずかな落ち込みを確認したのみである。以降の地区では確認されなかつた。



第9図 7区～9区造構実測図 (S=1/60)



第10図 10区・11区造構実測図 ( $S=1/60$ )

8区から10区にかけての状況を細かく見ると、8区で現われた落ち込みは9区まででも肩部が決して直線的でないことがわかり、少しずつ方向を変えているものと推定できる。10区では大きく方向が変わり、南側の調査区外へ伸びて行くものと推定できよう。2号落ち込みは規模、形状、層序から、自然河道としての性格が強いものと感じられ。おそらく日常の水流や周期的な洪水で運ばれた土砂で埋まり、その位置を幾度となく変えたものの一つであろう。水流の方向については、原則的に若山川と同じで、西から東と考えたい。そして、覆土から出土した遺物の時期が弥生後期を中心としていることから、その埋没に関しては弥生時代後期に、あまり時間をおかずに行なったものと思われる。

### 第3節 遺物

#### 1 土器・陶磁器（第11図、図版12）

第11図1～4は4号溝から出土した。1と3と4は覆土下部から、2は覆土中部から木器とともに検出した。5は4号溝に後続する5号溝から、6は1号落ち込みから出土した。7～13は遺物包含層からの出土である。14は表面採集の資料である。

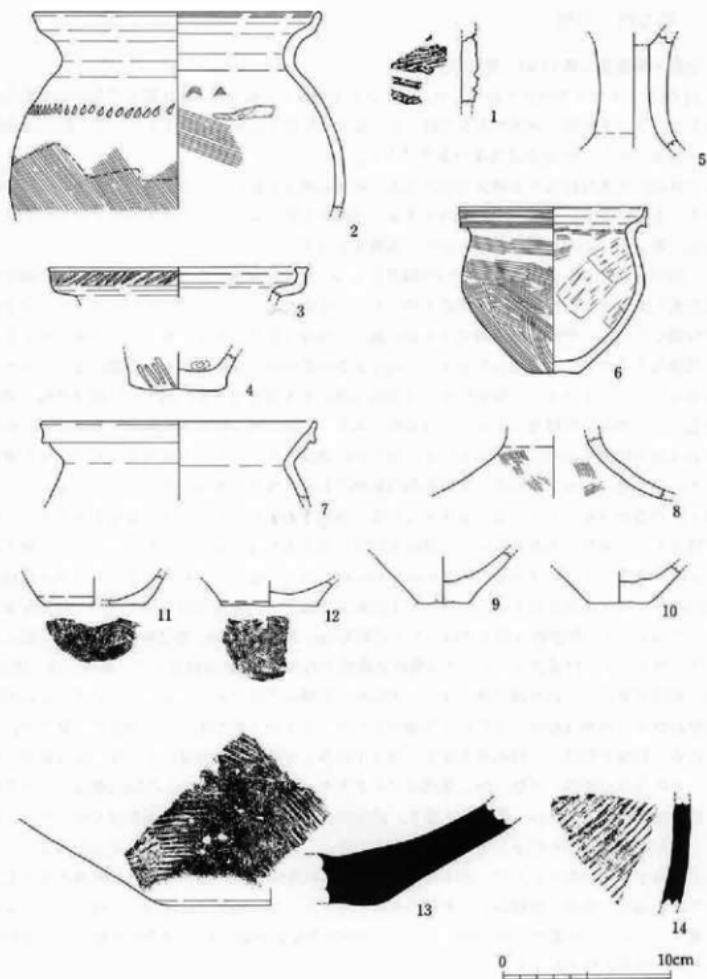
1は後期に位置付けられる繩文土器である。器面に縄文を転がし、太い沈線を施す。沈線の断面は円形で、上部に1本、下部に3本看取できる。下部の沈線の間に、ヘラ状工具による刺突文がわずかに残る。胎土中に小石や細砂を多く含み、黒褐色を呈す。

2～10は弥生土器である。2は短い口縁帯をもつ、有段口縁甕である。内外面にゆるい稜をもち、端部を丸くおさめる。体部は中位に最大径をもち、全体を細かいナナメハケで仕上げる。下半部には煤が付着している。肩部に強い刺突文を密に施し、内面は板ナデする。胎土中に石英、長石などの小石と海綿骨片を含み、灰黄褐色を呈す。3は近江系の受口状口縁甕である。端部は強いヨコナデで水平な面をつくり、直立する口縁帯外面には櫛状工具による刺突文を密に施す。外面は黒斑と煤化のため黒色だが、内面は暗褐色である。4は底部である。体部外面には板状工具による圧痕が、内底面には板状工具の圧痕と指頭圧痕がみられる。胎土中に細砂を多く含み、黒色を呈する。外面が著しく風化している。底径約6cmを測る。5は高杯の脚部である。外面の摩滅が激しいが、わずかにヨコハケが残り、内面には絞りがみえる。胎土中に石英、長石等の小石を多く含み、黄褐色を呈する。6は小型の甕である。頸部の屈曲がゆるく、器高と復元口径の比がほぼ1:1であることから、鉢とも考えられるが、体部下方にわずかながら煤がみとめられるので、甕としておく。直立する有段口縁に4条の擬凹線をもち、体部は細かいナナメハケを底部まで施す。内面は頸部をヨコハケ、体部を強いヘラケズリで仕上げる。体部最大径は中位にあって約11cm、器高約10cm、底径約3cmを測る。胎土中に小石を多く含み、淡い橙褐色を呈す。7は甕の口縁部である。付加状口縁をもち、頸部が強く屈曲する。摩滅・剥落が著しく、口縁部の強いヨコナデ以外、調整は不明である。灰白色を呈す。8は高杯の握部と思われる。外面は細かいタテハケの後タテヘラミガキで丁寧に仕上げ、内面は不整方向にハケがみられる。器面が剥落し、橙褐色を呈す。胎土中に多くの海綿骨片が混じる。9・10は底部の破片である。9の外面は底部に不整方向、体部にタテ方向のハケがみられるが、内面は摩滅のため不明である。胎土中小石を多く含み、灰褐色を呈す。底径約3cmを測る。10は外底面を強く板ナデし、体部にタテハケがわずかにみられる。大粒の小石を多く含み、黄褐色を呈す。底径約4cmを測る。

以上は弥生時代後期のもので、2は後業、羽咋市太田遺跡4号土坑<sup>1</sup>のものと同時期と思われる。3は刺突文の施文と端部の形態から、中業のものと考える。6は能登では組成の主体とはならない擬凹線を施すことから、後業のものと考える。7は押水町宿東山遺跡SK-75<sup>2</sup>等に同様の出土例があり、後業～末に位置付けられよう。

11・12は土師器椀の底部で、ともに中世前半、平安時代末から鎌倉時代頃のものであろう。11は内湾ぎみの体部をもち、右回りのロクロナデののち、底部を糸切りする。底部内面は指頭ナデで仕上げる。胎土、焼成とも良好で灰白色を呈するが、断面は黒色である。12は立ち上がりが急で外反する体部をもち、左回りの強いロクロナデで仕上げる。底部内面、底部外縁の調整は11と同様である。明るい黄灰色を呈す。

13・14は珠洲焼である。13は甕の底部と思われる。外面は水平方向の叩きに右上がりの叩きを重ねるが、一部摩滅して調整が消えている。叩き目は2.2cm幅に7本筋のもので、浅く細筋である。下部に



第11図 出土土器・陶磁器 ( $S = 1/3$ )

土器・陶磁器觀察表

番号	器種	出土地点	法量(cm)	胎土・焼成	調整(外面)	調整(内面)	備考
1	縄文土器	4号溝	現存高 4.2	やや粗 良好	縄文 沈縄 ヘラ状工具による刺突		
2	弥生土器 甕	4号溝	復元口径 17.0 現存高 11.9	密 良好	口縁 ヨコナデ 体部 ナナメハケ	板ナデ	体部下半に 煤が付着
3	弥生土器 甕	4号溝	復元口径 15.3 現存高 1.8	密 良好	ヨコナデ 掃による刺突	ヨコナデ	近江系、煤が 付着、黒斑
4	弥生土器 底部	4号溝	底径 現存高 5.6 2.4	やや密 やや歛	板状工具の圧痕	板状工具の圧痕 指頭圧痕	外面一部剥落
5	弥生土器 高杯	5号溝	現存高 7.2	やや粗 良好	ヨコハケ	絞り	外面摩滅剥落
6	弥生土器 甕	1号落ち 込み	復元口径 11.0 底径 器高 2.8 10.0	やや粗 良好	口縁 ヨコナデ 瓶凹線 体部 ナナメハケ	頸部 ヨコハケ 体部 ヘラケズリ	体部下部に 煤が付着
7	弥生土器 甕	9区 包含層	復元口径 16.3 現存高 4.7	密 やや歛	ヨコナデ	剥落のため不明	内外面とも 摩滅剥落
8	弥生土器 高杯	8区 包含層	現存高 3.8	密 良好	タテハケのち タテヘラミガキ	ナナメハケ	
9	弥生土器 底部	4、10区 包含層	底径 現存高 3.0 3.2	やや粗 良好	底面 不整方向にハ ケ 体部 タテハケ	摩滅のため不明	内外面とも 摩滅
10	弥生土器 底部	9区 包含層	底径 現存高 3.6 2.3	やや粗 良好	底面 板ナデ 体部 タテハケ	指頭圧痕	
11	土師器 碗	6区 包含層	底径 現存高 6.0 1.8	精良 良好	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ 指頭ナデ	ロクロ右回り
12	土師器 碗	7、8区 包含層	底径 現存高 5.9 1.5	精良 良好	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ 指頭ナデ	ロクロ左回り
13	珠洲焼 甕	18区 包含層	復元底径 12.6 現存高 6.2	密 良好	叩き		外面一部摩滅
14	珠洲焼 体部		現存高 6.1	精良 良好	叩き	板ナデ	

指頭による上向きの擦痕がみられ、底面には工具の圧痕と思われる凹みが残る。胎土は石英、長石、チャートの細砂を含むが密で、器面は灰色である。およそ中世後半のものと思われる<sup>1</sup>。14は臺もししくは甕の体部片で、外面に右上がりの叩きを有し、内面は横方向の板ナデを残す。叩き目は2.6cm幅に7本筋のもので太筋である。長石、チャートの微砂を含むが、胎土は密で、淡灰色を呈す。

この他、条痕調整土器、須恵器も出土しているが、小破片のため図化できなかった。条痕調整の土器は時期を細かく限定できないが、縄文晩期から弥生中期のどこかに属するものと思われる。

## 2 石器(第12図)

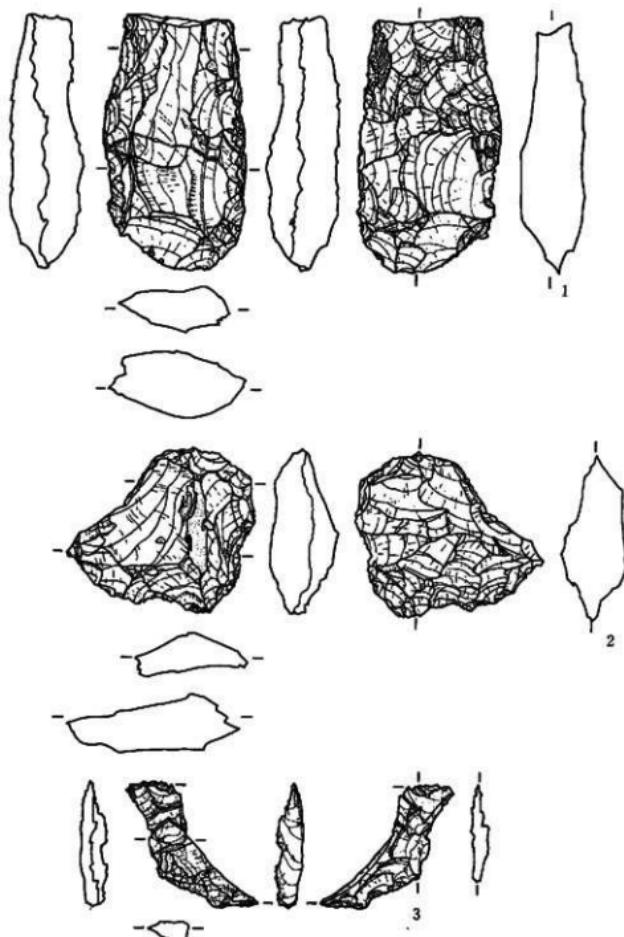
第12図は全て打製石器である。総じて不定型であり、文中の上下左右は、図のレイアウトを基準とする。1は12区のベース面直上で出土。縦長の石材の縁を剥離させ、尖り気味にしており、上端は欠け、下端は厚い舌状を呈する。形態的には石槍に近い。細部調整は行われているが、全体的に不整な形状で、特に左正面の左縁と下縁は段状を呈し、厚みも揃っていないことから、未製品の可能性もある。現存長7.6cm、幅4.3cm、厚さ2.1cm、重さ74.4gを測る。石材は珪質頁岩である。2は5区のベース面直上で出土。円弧状の反りを2辺に持つやや横長の形態で、縁は尖っている。剥離痕は左正面でよく観察される。上端に小規模な剥離痕、下端に階段状の不規則な剥離痕が認められ、全体的に鋭く細部調整された縁を切っている。上下端に対照的な形状の剥離痕が付く特徴からクサビ形石器と考えた。長さ5cm、幅5.5cm、厚さ2.1cm、重さ38.3gを測る。石材は輝石安山岩である。3は表面採集品。弧状の細長い形態で、上縁と弧の外縁が尖っている。上端に小規模な剥離痕、下端に階段状の不規則な剥離痕が認められ、2と同様にクサビ形石器と考える。弧の内縁に上端の加撃に沿ったリングが観察され、内縁側の原形は加撃によって失われたと考えてよい。外縁の剥離痕については上下位にはっきり認められ縁を鋭く尖らせていているが、切りあいによって外縁上位、同下位、下端の順に生じたものと分かる。現存長5cm、最大幅1.5cm、厚さ0.8cm、重さ4.7gを測る。石材は輝石安山岩である。2・3のクサビ形石器は縁の剥離や細部調整が上下端の剥離よりも古いため、刀器等として製作された後の転用を想定しているが、クサビ形石器自体の成形調整の可能性もある。

石槍は、能都町真駒遺跡<sup>2</sup>や内浦町新保遺跡<sup>3</sup>から出土したものに1に似た形態の類品がある。弥生時代以降は石槍の類例がほとんどないため、1の時期は縄文時代と考えたい。クサビ形石器は縄文、弥生<sup>4</sup>両時代に存在するが、今回の発掘調査で得られた遺構・遺物の中心時期である弥生後期まで降る資料は確実ではない。少量ながらより古い時期の遺物も出土していることから、2・3の時期は現状では弥生中期以前と考えておいた方が適切かもしれない。

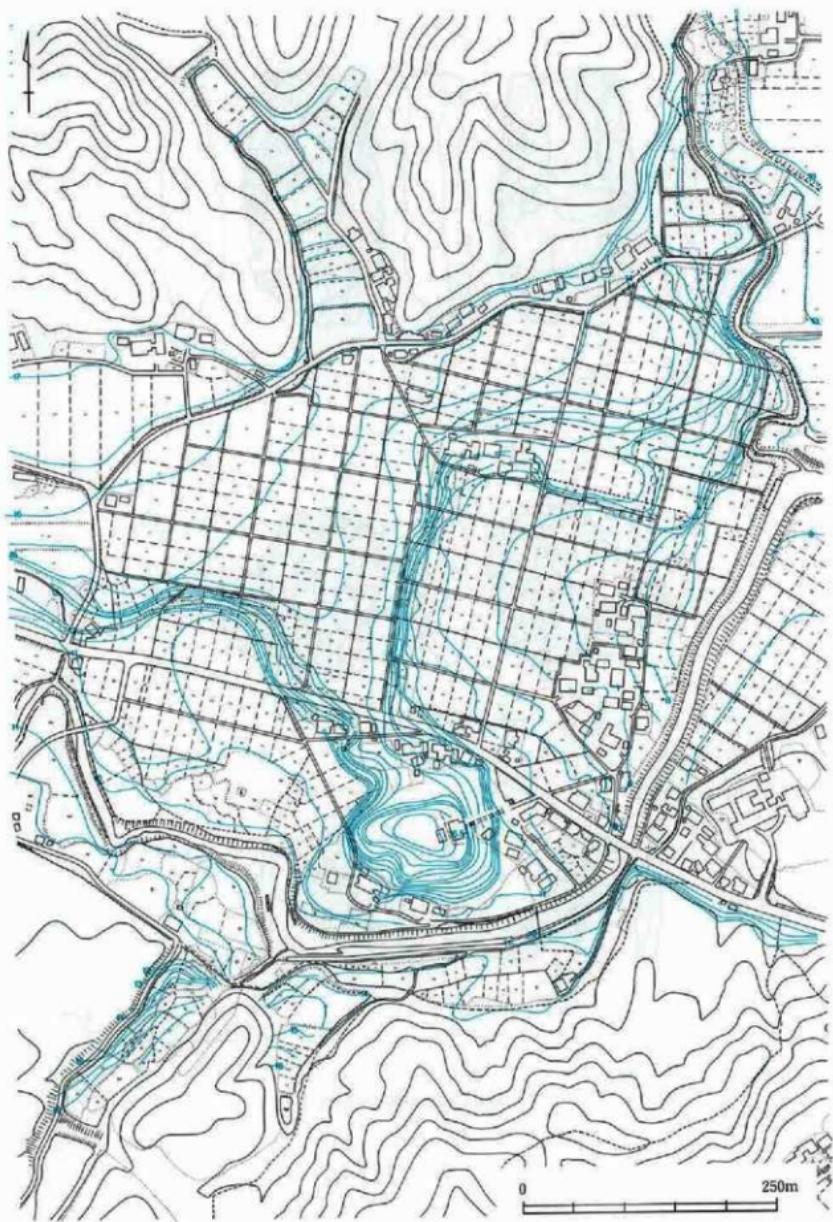
珪質頁岩、輝石安山岩については、弥生時代の様相が調査例が少なく不明確であるが、縄文時代においては珠洲市域の遺跡で普遍的に見ることができる<sup>5</sup>。おそらくは周辺地域に産出地があって、打製石器の主要石材の両翼を担う存在であったと評価して大過ないものと思われる。

### 註

- 1 羽咋市教育委員会「太田遺跡」 1991年
- 2 石川県立県立歴史文化財センター「宿東山遺跡」 1987年
- 3 珠洲市立珠洲史料館「珠洲の名陶」 1989年
- 4 能都町教育委員会・真駒遺跡調査團「石川県能都町真駒遺跡」 1986年
- 5 内浦町史編纂専門委員会「内浦町史」第一巻 自然・考古・社会 1981年
- 6 石川県立県立歴史文化財センター「下原原海岸遺跡」 1988年
- 7 珠洲市史編纂専門委員会「珠洲市史」第一巻=資料編 自然・考古・古代 1976年



第12図 出土石器 (S = 2/3)



第13図 道路周辺の現地形 ( $S = 1/5,000$ )



第14図 遺跡周辺の旧地形 (S=1/5,000)

## 第4章 まとめ

経念遺跡は、平成3年に行われた県営は場整備事業に係る埋蔵文化財分布調査によって発見された。平成4年に行われた発掘調査は小規模ではあるが、同じ年に調査された出田遺跡と並んで若山川流域では初めての本格的な考古学的調査と言えよう。それだけに付近に比較できる資料も少ないのであるが、本章では周辺の地形の検討も含めて、発掘調査で得られた遺構・遺物についてまとめたい。

遺跡周辺は、若山川の沖積作用によって形成された小平野と低山地の裾部が接して複雑に入り組んだ地形が展開する。第13図は遺跡の周辺の表層の等高線を示し、現在の地形を表した。平野部は概ね平坦であるが、川と山地の中間に位置に、川と似た方向に走る比高数mの段が見られる。段は大規模な洪水等で抉られた地形であり、段から現在の流路までの範囲は若山川の氾濫原と思われる。第14図は平成3年の分布調査時の試掘坑73坑で確認されたベース面の標高から等高線を示し、旧地形の復原を試みた。現流路付近では表層と大きな差はないが、山地に接近する調査区付近では、等高線が弓なりに連なっており、東西方向の谷地形が存在する。東は若山川と鈴内川が合流し方向を変える地点、西は若山川が強く蛇行する地点に向かうことから、両地点を結ぶような旧河道となる可能性があろう。今回の発掘調査では調査区の南部、7~10区で他区より1m近く下降する地形、さらに1m以上の深さの落ち込み肩部を検出し、2号落ち込みとした。2号落ち込みはその東西に走る方向、南への落ち、そして位置的に見て旧河道の北岸部周辺に相当するものと思われる。その埋没時期は、出土遺物から弥生時代後期と判明している。後世はやや壅んだ程度の地形であったものが、耕地整理の際に厚く盛土されて平坦化し、旧地形を完全に被覆したものと推定している。その他の遺構については全掘できたものもなく、詳細は不明である。ただし、4・5号溝、1号落ち込みについては、近接する2号落ち込みとほぼ同時期の弥生後期に埋没していることが確認されている。遺構の分布からは、南面する低山地裾部から河道の北岸部にかけての弥生後期の人々の活動を想定することができる。低い遺構密度から見て、居住域たる遺跡の中心部はより山地に近接して存在するものと思われる。

出土遺物は弥生後期の土器を中心とするが、縄文土器、土師器、須恵器、株洲焼も少量ながら存在し、様々な時期が複合する。弥生後期に遺構が確認され、遺物が増加する様相は県下全域で共通する傾向もある。古墳時代の遺物は出土しておらず、空白期的な状況を示すが、周辺の経念古墳群、経念横穴群等の密度の高い墳墓の分布とは対照的と言える。様々な時期の複合は、古麻志比古神社遺跡、出田遺跡、野々江遺跡<sup>1</sup>など周辺の集落遺跡で同様の傾向が見られる。その一方で、平地に設定された調査区に遺構が希薄で、遺跡の中心が平地でなく山地周辺に求められそうな傾向も共通している。居住域に制約が大きいため、山地裾とその周辺を時代を追って移動しながら少しずつ範囲を重複するような遺跡のあり方は、この地域の地形に即した適有の集落動態と捉えることが可能かもしれない。

以上の検討から、経念遺跡の今回の発掘調査区は弥生時代後期を中心とする複合集落遺跡の縁辺部に相当するものと推定される。株洲市域の集落遺跡の本格的な発掘調査はまだ途についたばかりであり、その性格、動態等は明らかになっていない。今後、調査例の増加、資料の蓄積、検討がやがて数々の課題を解決し、考古学的な見地から新たな地域像を構築していくものと思われるが、本書がその一助となるならば、幸いである。

### 註

1 珠株市教育委員会が平成6・7年度に発掘調査実施。担当の大安尚寿氏から教示を得た。

写 真 図 版



1号溝（東から）



2号溝（南から）



3号溝（北から）



3号溝土層（東から）



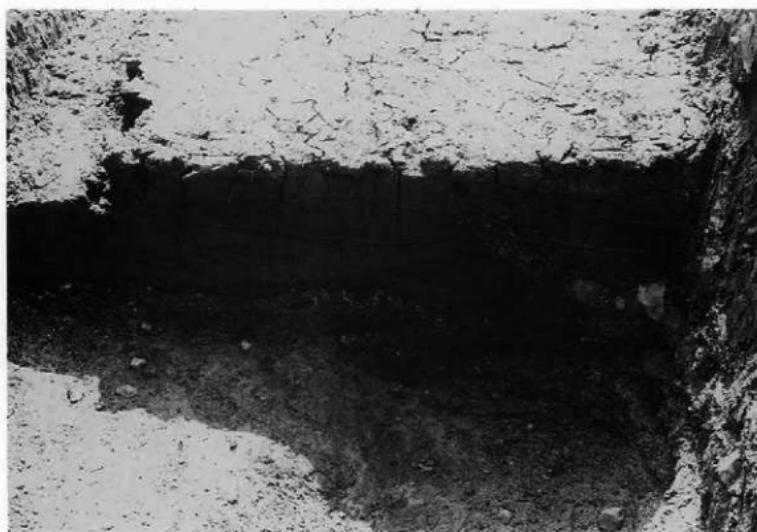
4号溝（南から）



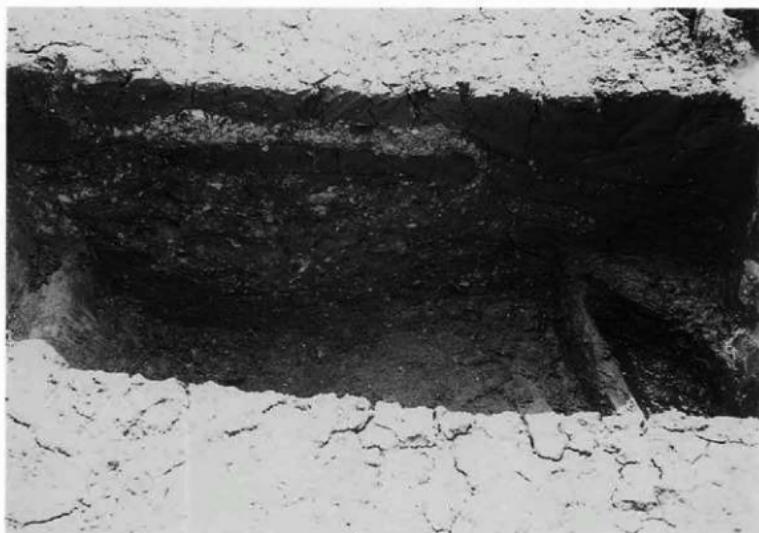
4号溝土層（南から）



8区76m 地点土層（西から）



8区79m 地点土層（西から）



9区83m地点土層（西から）



9区83m地点（北から）



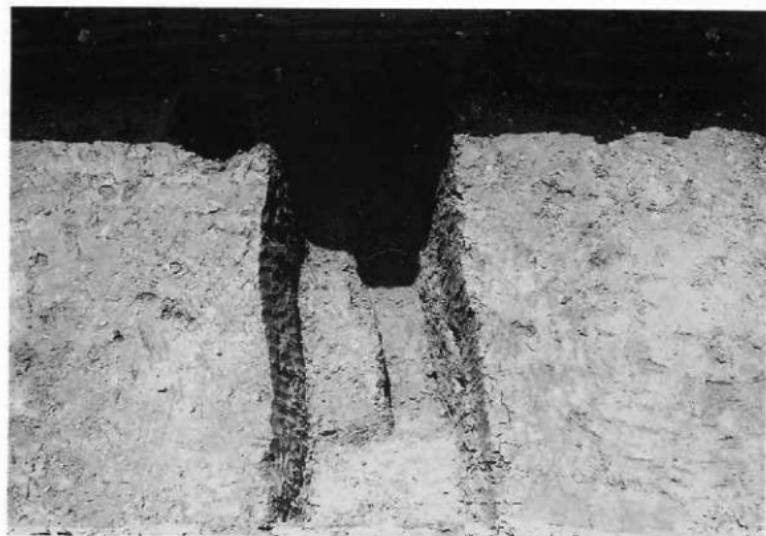
9区86m地点土層（東から）



9区86m地点（北から）



9区88m 地点土層（東から）



9区88m 地点（北から）



10区93m 地点上層（西から）



10区93m 地点（北から）

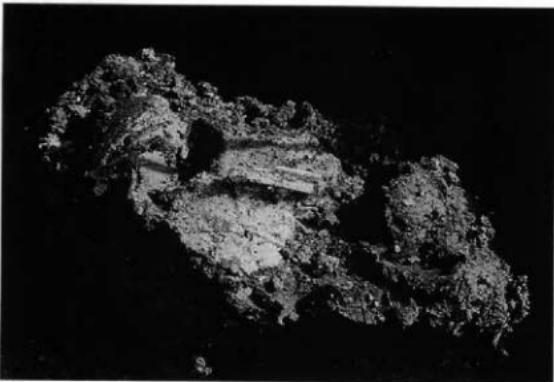
4号溝板材出土状況  
(東から)



8区76m地点木出土状況  
(東から)



9区86m地点土器出土状況  
(北から)





1～6区全景（南から）



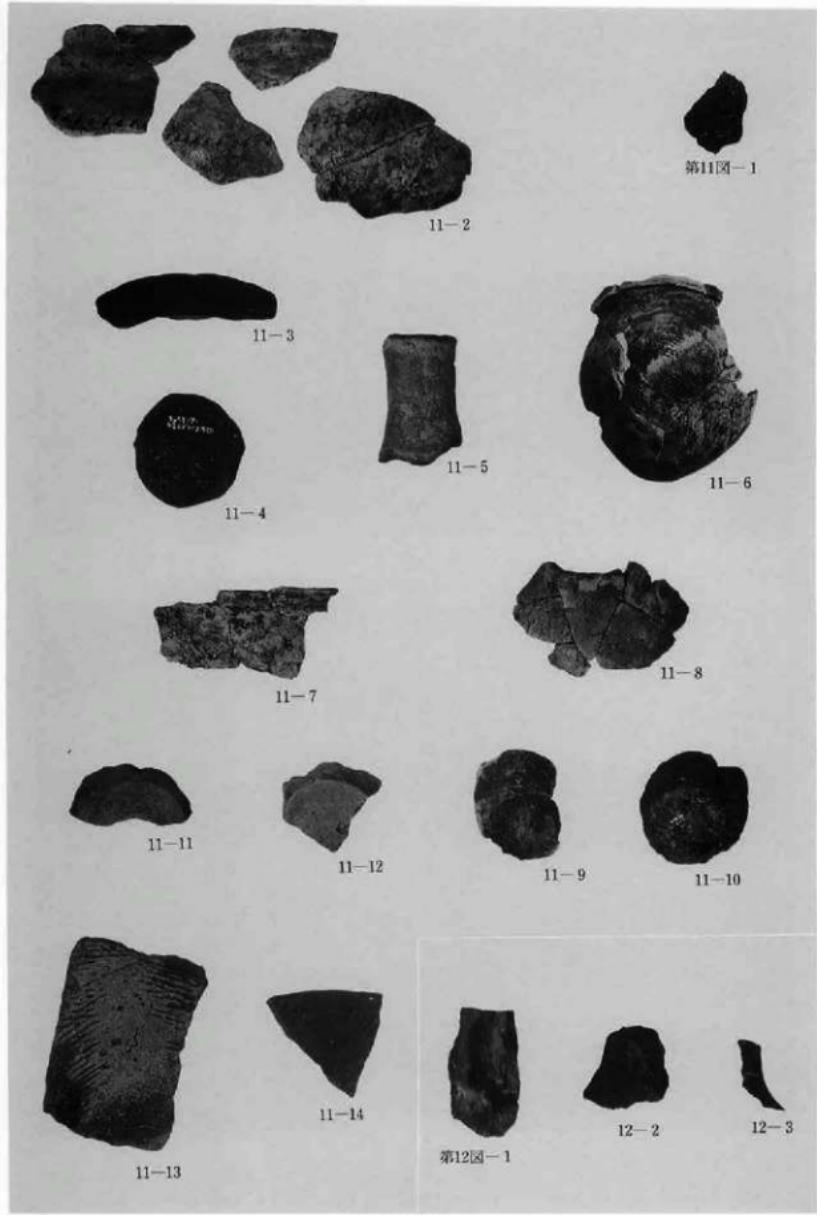
7～11区全景（西から）



12~18区全景（西から）



7~18区全景（東から）



出土遺物

## 珠洲市経念遺跡

一県営ほ場整備事業若山地区経念工区  
に係る埋蔵文化財発掘調査報告書一

---

平成 8 年 3 月 25 日 印刷  
平成 8 年 3 月 29 日 発行

編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター  
石川県金沢市米泉町 4 丁目133番地  
〒921 電話 (0762) 43-7692番

---

印 刷 株式会社 共栄